

むすび～ 在来線の再生に向けて～

鉄道に対する投資はいかなる主体がどのような形で行なうべきかという議論は今日まで本格的に議論されてきたことがなかったといえる。1964（昭和39）年にはじめて純損失を計上するまで国鉄は戦中戦後の混乱期を除けば黒字経営であり、昭和30年代の幹線を中心とした輸送力増強事業は、国鉄の借入金によってまかなわれ、東海道新幹線の建設も国鉄自身が行なった。しかし、東海道新幹線はあらゆる意味でレアケースであることが認識されなかった。東海道新幹線の建設は本質的には、高度成長期の限界に達しようとしていた東海道本線の線増による輸送力の増強事業であった。しかし、新幹線の高速度が目ざれると、国鉄の経営を無視した地域開発・利権目的の新幹線計画が強引に進められた。上越新幹線・青函トンネル等の国家的プロジェクトは国鉄とは別組織の鉄道建設公団によって進められた。

しかし、一見すると経営主体の国鉄から切り離された建設主体であるようにみえる鉄道建設公団は国鉄の経営を無視した新線建設を促進するシステムにすぎなかった。国鉄改革に際しても鉄道に対する公的資金導入のありかたは論議されなかった。改革にあたっては現有路線の経営改善が最大の課題とされ、1980（昭和55）年以来の国鉄再建論議のなかで新線建設や路線改良などの投資はタブー視されていたからである。

結局、鉄道建設・整備に対する公的資金の導入は国鉄自身と鉄道建設公団の膨大な累積債務を国鉄清算事業団に肩代わりさせ、その債務を国民の税金によって処理するという極めて事後処理的な方法によって初めて実現されつつある。

国鉄の分割民営化は、鉄道の経営主体であるJR会社に公共性よりも企業原理の重視をもたらした。しかし、企業原理を鉄道の建設・整備から運営まで一貫して適用しようとするれば、長期的見通しであれ採算はとりにくくなり、結局大多数の路線では消極的経営姿勢を取るのが最良の選択であるという結論になる。

たしかに、JR会社に公共性に基づく投資を求めるのは、かつての轍を踏まないためにも、厳しく戒められなければならない。しかし、JR会社が運営している鉄道に公共性が存在していることは疑いのない事実である。そこで、その公共性に基づく投資については公的資金によって行なわれるべきで

あるというのが我々の認識である。ただ、公的資金をどのような形で導入すべきであるかという問題は残る。いわゆる上下分離方式は、建設主体・整備主体と運営主体を分離する方式であるが、軌道等の下部構造の建設・整備に対する費用は、公共性に相応するものとみなして公的資金を導入すべきであるというのが今回の研究の結論である。

国鉄時代、例外的に認められていた地方自治体による駅整備や道路財源による高架化は消極的な公共性に対する負担であるが、今後は鉄道そのものに対しても地方自治体が積極的に公共性に対する負担を行なわなければならないであろう。

では、公的資金導入の主体が何であるべきかという議論であるが、鉄道がかつてのように中央集権的機構として機能する時代はおわっており、国土軸になりうるような路線の建設はもはやありえない。しかし、域内ネットワークの中心である在来鉄道の建設・整備事業は地方自治体が主導権を持つべきである。地方が主導権を持つことの効果は、少なくとも国よりは、地域の実情に即した事業の遂行が可能になることであろう。そのためには、中央から地方への権限の移譲と地方自治体の財政基盤強化が必要である。国は補助金による事業の統制ではなく、鉄道整備の技術的助言やノウハウの提供を行なう程度にその役割をとどめておくべきであろう。

公的資金の導入先として具体的には、鉄道が特性を発揮できる中距離都市間輸送と都市近郊輸送の潜在需要が存在するにもかかわらず、JR単独では総事業費の面から投資を見送らざるをえない在来線の改良事業がもっと注目されてもよいと思われる。このような旧態依然とした路線の近代化は沿線自治体にとっては、域内交流の活性化や交通環境の改善といった社会的機能を鉄道に与えることによって、将来的にも公共交通機関を確保することを意味している。また、国鉄改革の趣旨から現有路線の維持をなかば義務付けられた形のJRにとっては、近代化による乗客の増加は収支の改善に寄与することになるだろう。

今回、各地の市役所・県庁に取材を行なった。鉄道路線がある多くの市町村では程度の差はあれ、既存在来線の改良を要望している。ただ、今日まで鉄道の整備には関与したことがない自治体がほとんどであるためか、どの程度の財政負担を行なうべきなのか模索している段階の自治体が多いようである。地方自治体が一部負担して既存在来線の改良事業を実現したケースはま

だ少ないが、徐々に事業の種類とその種類に応じた負担割合が定型化していけば実現の可能性が出てくる計画が少なくないように思われた。地域の実情に即した鉄道の整備が行なわれて陳腐化した在来線が再生することを願って止まない。